

「女三界に家なし」と言います。昔の女性の心得として修身の時間などに教えたそうです。「三界」とは三つの世界と書きます。もともとは仏教の教えで、お釈迦様が7歳の子どもに「おうちはどこ？」と尋ねたら、「三界に家なし」と答えたものだから、お釈迦様は感動して成人前のその子どもを弟子にしたというお話です。死んだ後三つの世界をたどっていくが、そのどこにも安住の地はないという意味で、「女三界に家なし」とは、夫の家に嫁いでいく女性たちに、それなりの覚悟を求めた戒めというわけです。

弟子たちも、「家なし」という状況で、不安や寂しさを切実に感じていたようです。イエス様がいなくなるという心細さを予感していたからです。弟子たちがまるで幼子が母親を探すようにイエス様を捜すときが来ると、主は言われました(13:33)。ペトロは、「主よ、どこへ行かれるのですか。」と、幼子が母にすがるように尋ねました(13:36)。トマスは、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうしてその道を知ることができるのでしょうか。」と悲痛な抗議をします(14:5)。フィリポも「主よ、わたしたちにも御父をお示してください。そうすれば満足できます。」と願います。弟子たちは皆が皆、こころのなかにポッカリ空いた空虚さをどうすることもできずにいるのです。この弟子たちの姿はまさに私たち自身の姿ではないでしょうか。私たちもイエス様に会いたいし、確かに天国があると知って安心したいのです。

この弟子たちにイエス様は、「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」と命ぜられました。「心を騒がせてはいけない」とおっしゃるのではありません。イエス様自身も「心を騒がせる」一人の人であり(13:21)、「あなたがたには、この世で悩みがある」(16:33 口語訳)と悩みがあることを認めておられます。ここで「心を騒がせるな」というのは、心の騒ぎを持ちながらも、それに飲み込まれずに、一歩離れたところに魂の静けさを保つことができる信仰というものについて語っておられるのです。その信仰とは、「神を信じ…(イエス様)をも信じる」ことです。

続けてイエス様は、その信仰を持つことができるそのわけを再臨の思想で説明されます。最後の審判の教えで、終末論とも言います。使徒信条には、「かしこより来たりて、生けるものと死ねるものとを裁きたまわん」とあります。これをイエス様は、「場所を用意しに行き」、「迎えに来る」と言い表されました。つまり「三界に家なし」のままにしては置かないから、という訳です。

この終末論の思想は、初代教会の教えでは非常に特徴的で、天変地異が起こって「人の子が雲に乗って来る」という具合に伝承されていました(マルコ 13:24-26)。パウロもこうした民間伝承を受けついでいます。けれどもこうした説明に対して、ヨハネはどうも不服だったようです。世の終わりを吹聴して教団に貢がせるカルト宗教は後を絶ちませんが、「真の信仰はそういうものではない」と、この福音書を書いたヨハネは言いたかった。

つまり、再臨信仰の落とし穴です。再臨信仰には、イエス様の十字架の復活で成し遂げ

られたことを骨抜きにして、やっぱり再臨が来なければ完全じゃない、とってしまう落とし穴があるのです。十字架は不完全だったとする誤った信仰に走ってしまう危険がある。そこでヨハネは、次のようなイエス様の言葉を紹介しました。それが4節、7節、9節にある言葉です。「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」(14:4)。「今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている」(14:7)。「わたしを見た者は、父を見たのだ」(14:9)。「主よ、どこへ」と問うペトロ、「分かりません…知りません」というトマス、「見ないと満足できません」と言うフィリポ…彼らに対して、「既に知っている」「今や見ている」というのはどういうことでしょうか。こうした「今から」とか「既に」の強調には、すでに世の終わりは来ている、最後の審判は完了しているというニュアンスが感じられます。これに類する言葉はほかにもあります。たとえば3章の18節19節、「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」、5章の24節25節、「はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」、11章25節26節、「イエスは言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。』」こうした章句は「救いの現在性」と呼ばれているもので、今この瞬間、このみ言葉を聞いているこの瞬間に、救いは成就しているというイエス様の宣言です。

再臨信仰の落とし穴、「いつか」救われるが「まだ」不完全だという思想を、「今」「既に」という言葉は一扫してしまった。そしてあなたは今この瞬間、そのままで完全ですという主の御声を聞くのです。なぜなのか？ なぜそのままで完全なのか？ その理由は私たちの側にありません。イエス様は述べられます。6節7節、「イエスは言われた。『わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。』」9節「わたしを見た者は、父を見たのだ。」さあ、ここにも出てきました。(先週もお話したように)「わたしは～である」という特異な表現方法。これは「わたしはいる」という断言的な語法、ホレブで主がモーセに告げた神の名、「わたしはある」を基盤にしています。「わたしがいる。」わたしが道として、真理として、命としてここにいる。その限り、あなたがたは父への道、真理への道、命への道の上にあるのだ。「わたしがいる。」その限り、終末を待たずとも、今この瞬間にあなたは完全なのだ。幼子が親を探して泣くときに、「ここにいますよ」と親が声をかけてくれる。そのように神様は私たちに声をかけてくださいます。この神様の声を聞きながら生きる人生、それが私たちの人生ではないでしょうか。自転車の練習でお父さんに後ろを支えてもらって走るようなものです。後ろのお父さんは見えないけれども、確かに声が聞こえます。だから勇気を出してペダルをこぎましょう。